

忘れてはいけない！

中国の民衆の中で深く絆を結んだ人々を

—『満蒙開拓民』の悲劇を超えて』を上梓して思うこと

大類善啓（会員）

キッシンジャー極秘訪中

私が中国に本当に関心を持ったというか、我が内なる心から、好奇心が沸き起こるように中国に興味を持ったのは一九七一年、キッシンジャーの極秘訪中が明らかになった時だった。当時私は、男性サラリーマンを読者対象とし、売り上げトップを誇る勢いにあった週刊誌の記者だった。

その時世界の政治状況は冷戦時代と言われ、中国とアメリカは国交も回復していないだけでなく、厳しい米中関

係と言われるほどの状況だった。それ故もあり、米中の極秘接触が明らかになった時、世界はもちろん驚愕した。当時の佐藤栄作首相が「青天の霹靂」と驚きを隠さないほど、世界を揺るがしたキッシンジャーの極秘訪中だったのである。彼はニクソン米大統領の補佐官だった

この米中極秘接触をお膳立てしたのが誰だったのか、当時の私はその秘密ルートを探るべく取材をしていたところ、このことを知った仲間のある記者が、「大類さん、ちょっとおもしろい人物を紹介するよ」と私に紹介してく

れたのが、戦前の上海にいたという人物である。すでに亡くなっているであろうが、ここでは仮にAさんとしておこう。

キッシンジャーは中国を秘密訪問すべく海外を旅していたが、パキスタンの首都カラチで「身体が不調」ということで同行の記者たちを信用させ、「ホテルから一步も外に出なかった」と言われたが、実はその三日間ほどの間に、極秘にカラチから北京に飛び、周恩来総理と秘密会見し、米中国交回復の同意を確認したのだった。アメリカは中国と接触すべく、あら

ゆるルートを探ったという。まだ中国に復帰する前の香港の裏社会を牛耳る人物ないし組織もその一つだという噂も私の耳には入っていた。

そんな怪しげな噂や奇々怪々な情報が耳に入ってくる時代の中でのAさんとの出会いだった。Aさんとの会話はすこぶるおもしろいものだったが、彼が私にもたらしてくれた中で、一番私の興味と関心を沸き立たせたのは、中国の秘密結社である青幫、紅幫という存在である。このような秘密結社のこと

に言及していくと紙数がいくらあっても切りがない。ただその時、中国の裏社会だけでなく、現に中国社会を動かす情報関係者の中にも当時、そのような秘密組織を利用し活用するだけでなく、現に結社員もいたという事実を知ったことだった。

私がAさんに、新中国になってもまだかつて上海の裏社会などを支配した青幫、紅幫などが存在するのかと聞くと、氏は「なくなっていますね。今なお存在します、というところに中国の中国たる所以があるんですよ」と言っ

た。想像するにAさん自身も戦前の上海で、その組織の一員だったのではなにか。Aさんはそのことを肯定しなかったが、とりわけ否定するような言辞もなかった。しかし察するに、明らかに青幫の一員だったか、もしくは極めて近い存在だったと思う。

中国の深部に存在していた秘密

結社

そして、この結社の存在を改めて確認し、中国社会の深部に存在し、現に民衆の中にしっかりと入っていたことを改めて確認したのは、ハルビン市方正県に關わるようになり、「満洲国」の副県長をしていたKさんと親しくなっていたからである。

ある会合の際、同じ卓を六人ほどで囲んで食事をした時、Kさんがたまた私の隣だったこともあり、やや小さい声で青幫のことを聞いてみたが、とりわけ私を満足させるような話しなかった。しかし、休日だった翌日の夕方、私の自宅に電話をかけてきて、

「実は昨日の話だがね」と切り出し、青幫が中国社会の深部に存在したことを明らかにしてくれたのだ。

Kさんは戦前、「満洲国」のある県の副県長だった。当時の「満洲国」では、一応形の上での県長は、漢族や満洲族の間になる。しかし、実質的に権限を持つのが副県長であり、その地位は日本人が占めていた。

Kさんは私に語った。自分が副県長として町や村を円満に統治するには、力を持つ地元青幫のような組織と友好的な良い関係を持つ必要があったという。そこでKさんは青幫の頭目に会い話し合った。そしてKさん自身、青幫に入ったのだと私に語ってくれた。

そうか、やはり青幫というような秘密組織が中国の民衆社会に深く入り込んでいたのだ、と納得した。そして私が出したのか、Kさんの方が言及したのか、今ではわからないが、石光真清について話が飛んだ。

石光真清は『城下の人』『曠野の花』『望郷の歌』『誰のために』を著し、旧満洲に深く入り込み諜報活動に従事し

ていた人である。私にしては珍しく、この四部作を二度読んだ記憶がある。今も手元にあるそれは一九七八年から一九七九年にかけて刊行された中公文庫版である。私は何度も古書店に本を売ったが、この四部作は今でも私の書棚にある。

Kさんはこう言うのだ。「石光真清のように中国社会に深く入り込むには、青幫のような組織に入らないと何もできないのだ」と。

私は納得し、Kさんとの長い一時間ほどの電話を終えた。

日本人公墓の存在

さて、私がハルビン市方正県に関わるようになったのは、一九九〇年代からである。すでに本誌でも、私と方正との関わりは記したこともあるので詳細は省くが、このたび、本稿のタイトルにあるように、『満蒙開拓団』の悲劇を超えて』を編著として上梓するに当たり、その内容の一部を紹介しつつ、収録された文章がこれからの日中関係

の豊かな交流を進めていく上で参考になればと思っている。

一九九三年、初めて方正を訪ねた。方正県の中心地から離れた砲台山の麓に建立されている日本人公墓を前にして私が思ったのは、日本と中国が逆の立場だったら、日本は中国人の墓を建てたのだろうか、ということだった。多分、否だろう。では今の中国政府なら日本人の公墓を建立しただろうか。これも否という答えが返ってくるのではないだろうか。

「方正地区日本人公墓」が建立されたのは一九六三年、周恩来総理、陳毅外相兼副総理が健在だった頃である。

一九六〇年、日本の作家代表団が訪中した。団長は作家の野間宏、団員には亀井勝一郎、そして若き大江健三郎や開高健らがいた。野間宏が挨拶の中で、「私たちは日本が侵略したことを忘れないし、忘れてはいけないと思う」と述べたのに対して、応対した陳毅は「我々は忘れたいと思っっている。しかし貴方たちが忘れない、と言うなら日中関係はうまくいくだろう。逆に、日

本が忘れてしまい、中国が忘れない、と言うなら日中関係は良くならないだろう」と語った。

あれから六十数年、今の日中関係をどう表現すべきだろうか。

日本人公墓建立は「歴史的事業なのだ」

私は方正友好交流の会の理事長として会報『星火方正』を年に二回発行しているが、今までの会報の中で特筆に値する原稿と言えば、日本人公墓建立の仕事を命じられた黒龍江省人民政府外事処の趙喜晨の回想記事であろうと思う。二〇一〇年五月に発行した会報の記事である。

趙氏は一九六一年、二六歳の時、外事弁公室に異動を命じられ、一九六三年、公墓建立の仕事に携わるのである。彼は、当時の中国の政治、経済状態、また日中関係から言えば、日本人の墓などはコンクリート製にしてもおかしくはない状況だったという。しかし、「私たちは討論し、これは

長く言い伝えられる大仕事であるから、真剣に対処しなければならぬ。歴史の考察にも耐えうる永久的な墓碑を建てる必要がある」という結論に達し、当時の破壊されたハルビンの外国人墓地を自転車で回り、花崗岩の石碑を見つけるのだった。その碑の隅にはロシア語で「イタリア製」と彫ってある。

その花崗岩を持って石碑彫刻工場へ運んだ。すると工場の人たちは、「どうして日本人の碑を建てるのか、まったく理解できない」と言う。それもそうだろう。そこを趙氏は根気よく説明し理解してもらい、ハルビンの著名な書家に「方正地区日本人公墓」と書いてもらい、工場の人々に、「くれぐれも気を入れて彫るように頼んだ」のである。お座なりな仕事ではなく、日本人公墓建立は彼が自ら言うように、まさに「歴史的事業だった」のである。

一九六六年、文化大革命が始まった。多くの文化遺産が破壊され、多くの歴史上有名な人たちの墓が破壊された。そのような中、紅衛兵たちは日本人公墓を見つけ、壊そうとした。方正県政

府はどう対処すべきか省政府に指示を仰いだ。趙氏はすぐに上司に指示を仰いだところ、省政府の名で以下のような命令が出た。

「この公墓は中央政府が許可して建設したものだ。埋葬されているのは日本の庶民であり、日本の軍人ではない。誰であれ、どの団体であれ、それを壊してはならない」。

同時に、公安部門に公墓を保護する措置を講ずるよう要請し、公墓の周りに柵をめぐらせて警備を厳重にした。紅衛兵たちはこの状況を見て、公墓を壊すことを諦め、引き下がったのである。

周恩来総理の素晴らしさ

公墓建立のきっかけを作ったのは松田ちゑさんという残留婦人だが、彼女についても、かつて本誌で記したが、未だ多くの人が知らないであろうと思う事実をここに記して、周恩来総理に関する素晴らしいエピソードを明らかにしたいと思う。

松田ちゑさんが方正県政府に行き、自分たちで葬る許可をもらいに行くことにしたのだが、その願いは県政府から上部機関の黒龍江省政府に行き、最終的に北京の中央政府に行き、松田さんが嘆願した書類は陳毅外相を経由して周恩来総理に届いた。

周恩来は熟慮に熟慮を重ねた。なぜ、そう思うのか。

実は松田ちゑさんは文革中に「日本のスパイ」として告発され、三年半ほど留置され、死刑の告知を受けたのだ。外国人を死刑にするのは、中央政府の最高レベルの承認が必要である。そしてその書類は周恩来のところに来た。

周恩来はその書類を見て、「この松田ちゑさんは、日本人公墓を嘆願した人ではないか。彼女は無罪だ。直ちに釈放しなさい」と言ったのである。

当時、方正県政府はこの決定に驚き、間違いではないかと省政府に電話を入れたところ、省政府は「これは周恩来総理の決定である。間違いはない」と回答したのだ。松田ちゑさんが陥ったこの時の状況について周恩来はこのよ

うに対応したのである。

三五年目の真実

実はこの事実が明らかになったのは、松田ちゑさんが無罪として釈放されてから三五年後である。

ちゑさんの息子である崔鳳義さんは、母ちゑさんとともに東京に移り住んだ。そしてそれから、三五年後に故郷である方正を再訪してわかった真相である。崔さんはこの時、かつて方正県の公安局で仕事をしていたある退職者から驚くべき事実を知らされたのである。崔さんはこう書いている。

「私の母が出獄でき、無実の罪を晴らすことができたことについて、私が誰よりも感謝しているのは、他の誰でもなく、またどの上部組織でもなく、中国國務院総理周恩来である。周総理の指示によって母の命が救われたのだ。母が無実で釈放されてから三五年経って私が方正を再訪した時、私はかつて方正県公安局に勤め、現在すでに退職していた知人からこのことを知らされ

た。当時、母は捕らえられ入獄した後、

一九七一年十月、中国人民解放軍方正

県保衛部審判係（文化大革命の期間、

公安局、検察庁、裁判所はすべて軍の

管轄下にあった）によって決定され、

省の公安局に上げられた書類では、私

の母は死刑の判決だった。この判決が

省の公安厅から国家公安部に上げられ、

判決が国家刑事判決に関わるものであ

り、同時に日本との関係も考慮されたと

考えられる。そのためこの資料はさら

さらに周恩来総理のもとへ回された。

周恩来総理は一九六三年、方正県で

「方正地区日本人公墓」建設を許可し

た資料によって、私の母が日本人公墓

建設の主唱者であり推進者であること

を知っていた。中国人民解放軍方正県

保衛部審判係が私の母を死刑にする

という資料の中で最も主要な罪は「方正

地区日本人公墓」の建設の上で主導的

な役割を果たしたことにあった。そし

てさらに私の母に被せられた罪名は何

の根拠もないものだった。このため周

総理は資料を見た後すぐ「無罪、即時

釈放」の指示を出したのである」（崔

鳳義著『東京回想録』二〇〇六年刊、
奥村正雄訳、『星火方正』四号所収、
二〇〇七年五月刊）。

藤原長作さんの中国への貢献

戦後の日中交流史では、有名無名の多くの人々が活躍したが、藤原長作さんほど庶民レベルにおける公益的な貢献をした人はいないのではないだろうか。

藤原さんは、一九一二（大正元）年十二月、岩手県和賀郡沢内村で生まれた。その年は、明治の年号の最後の年だった。また、東京市電の大ストライキで明けた年でもあった。当時の日本は、日露戦争以来の公債の負担と軍事費の増加による財政難に悩み、慢性的な不況に陥っていた。苦しい生活を打開しようとする大都会の人々は、各所でストライキを起こしていた。

極貧の家庭の二男として生まれた長作さんは、いつもひもじい思いをしていた。米を口にできるのは、正月とお盆の時以外にはほとんどない、という

ような状況だった。そのような環境にあったから長作は、なんとしても米の飯を食べたいと思っていた。

長作は本を読むのが好きで、二宮尊徳や秋田県の農民、石川理紀之助などの伝記を読む一方、稗田を耕し、馬の世話をして人の倍働き、人の倍稼ぐようになった。時代は昭和、世界には恐慌の嵐が吹き荒れ、東北の農村では娘たちの身売りが日常的に進んでいた。そのような中、長作は南米移民の夢を思うこともあったが、ブラジル移民の考えは事情もあり消えた。

縁談もあり、ミエという器量良しで働き者と炭焼き小屋での新婚生活が始まった。しかしミエは生後六か月の幼子を残し死んでしまった。しかし、長作は一生懸命働きました。

日本一の米作り

一九四一年、太平洋戦争が始まり、長作も召集されたが、南方戦線に行かずに済んだ。そして戦争は日本の敗北に終わった。

新しい時代が始まった。農地改革が進み、小作農は解放され、沢内村にも沢内更生連盟、青年同志会などの組織が生まれ、いろいろな社会講座が開催された。勉強熱心な長作は大いに刺激され、岩手大学の農学部にも通い、米作りの技術も理論も学んだ。

そうして米作り日本一になったのだ。一九五六年二月、朝日新聞東京本社講堂で開かれた「米作り日本一」の表彰式でカメラマンのフラッシュを浴びた。長作はこの時、四三歳だった。

しかし時代は大きく変貌しつつあった。米の生産調整が始まり、減反政策がやってきた。

米作りに命をかけてきた農民たちに、「米を作るな」と言うのだ。長作も悩んだ。

そのような時、満蒙開拓青少年義勇軍として満洲へ行く予定だったという五十近い男が長作を訪ねてきた。男は、「家は貧乏で水呑み百姓、おらぁ、満洲で思いきり働いて米作って飯いっぱい食うのが夢でした」と言う。

長作が「零下四十度にもなる満洲じゃ、

米作りは無理ださ」と言えば、男は「いや、満洲ではあの頃でも、米作りはしたです」と言う。

長作はその時初めて、零下四十度の満洲でもわずかながら稲作ができることを知った。満洲では高粱とトウモロコシしか獲れないと、ずっと思い込んでいたからだ。

さっそく息子が持っていた地図を取り出して見た。沢内村は北緯四十度、北京とは同じだ。改めて中国を見た。広大な平野が広がっている。北海道で稲作ができるなら、かつての満洲で米が獲れるのは当然だ。

日中が国交を回復してから六年が経とうとしていた。そんなある日、テレビのニュースで、中国へ稲作指導のため学者と技術者が渡ったと知った。驚いた長作はそれ以来、中国へ行っていたいと強く思うようになった。息子にそんな思いを口にする、「行ってくればいいじゃないか」と言う。息子にしてみれば、そんな強い気持ちがあるとは思っていない。

一九七九年六月末、長作は初めて中

国の大地を踏んだ。この時、満六六歳と六か月である。訪問先は、北京、上海、南京、山西省の石家荘、太原、そして大寨だった。大寨は当時、「農業は大寨に学べ」と言われ、人民公社の模範とされていた。大寨で初めて中国の水田を見た長作には、中国の稲作技術は日本の二、三十年前の水準に思われた。通訳から、稲作の実情を知ったのも収穫だった。自分は直接関係ないが、日本の中国人民に対する侵略戦争についても反省させられる長作だった。

この旅で長作は、自分の稲作技術は、やはり中国東北でこそ活かせると確信するのだった。

方正県への旅立ち

翌一九八〇年、長作は日中友好黒龍江省農業視察訪中団に参加できる機会を持った。それは、方正県へ戦後初めて日本から訪問する視察団でもあった。当時、ハルビンから方正の中心地まで五時間たっぷりとかかった。訪中団の三台のマイクロバスが方正の中心地に

着けば、二千人以上の出迎えである。その中には残留日本人も何百人かはいるといふ。涙、涙、涙の出迎えである。長作も涙なしにその光景を見ることはできなかった。

中国側との懇談が始まると、長作は中国の人々の熱心さに驚いた。中国側はまた長作が「米作り日本一」と知ると大いに関心を示した。細かい質問がいろいろと出たが、長作はしびれを切らすかのように「自分にやらせてみなさい」と言うのだった。

そして翌年の一九八一年、再び方正を訪れ、老農の家に半年近く泊まり込み、長作の稲作法を実践したのだ。当初は疑問を持っていた農民も多かったが、長作の試験田の優秀なことが鮮明に明らかになってきた。農民たちは、来年は自分たちを指導してくれと懇願した。

このような方正での長作の活動ぶりは、実は本稿の表題になっている『満蒙開拓団』の悲劇を超えて』に、私が詳しく書いた文章も収録した。

長作は「日中友好水稲王」と言われ、

一九八九年には「日本の水稲王が今や中国を揺り動かしている」と称賛され、中央テレビ局の全国放送でも彼の活動ぶりが報じられたのである。そして訪中最後の九月二十九日、人民大会堂で「中国政府を代表して、あなたが中国に対して果たされた大きな貢献に感謝いたします」という言葉とともに、中国国家外国専門家局から榮譽証書を授与された。そして時の李鵬首相ら幹部と一緒に記念撮影に収まり、レセプションでは、祝宴が始まってすぐ李鵬首相から握手を求められた。

そして翌年の一九九〇年には中国政府から国慶節の招待状が届き、九月二十七日の北京の人民大会堂で中国農業奨賞を受けた。その後の宴席で、長作の生産三倍化の水稲技術は、十一省に拡大したことを知らされるのだった。

例えば、二〇〇〇年代の半ばだったか。私がハルビンのホテルで外事公室の人と昼食をとみにしていた時、彼はホテルで食事をする人々を見ながら、「中国人は今みんな、こんな美味しいご飯、米を食べていますが、これは藤

原さんのお陰です。中国の人たちはみんなこのことを知っています」と言い、本当に驚いた。それほど功績を長作は中国にもたらしたのだ。

中日友好園林の中は…

方正には「方正地区日本人公墓」の隣に同じ大きさで、「麻山地区日本人公墓」が建っている。この公墓には、麻山で集団自決した四百人ほどの人々のお骨が納められており、一九八四年に建立された。実はこの公墓建立に力があつたのは金丸千尋である。

金丸は満鉄経営の鉄道技術者養成所に入り、一九四五年四月卒業後、満鉄チチハル検車区に勤務する。満十六歳の時だ。しかしすぐに敗戦。その後、八路军に入った。

一九五八年に帰国した金丸は以後、日中友好運動に全力を投入した。その彼もまた今では黄泉の国の住人であるが、私は生前にインタビューして「金丸千尋 中国・東北との友好に駆けた男」と題して、金丸の人生を描いた。

定価:(本体2,200円)+税
批評社

ISBN978-4-8265-0746-2
C1021 ¥2200

「満蒙開拓民」の悲劇を超えて 大類善啓 編著

●日本人公墓建立に至る周恩来総理の熟慮、そして黒龍江省政府要人の熱い想い。●公墓建立のきっかけを作り、日中の架け橋となった松田ちあさんの勇気。●中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇氏の苦闘。●麻山事件を背景に「麻山地区日本人公墓」建立に尽力した金丸千尋氏の情熱。●中国政府に招聘され、中国で「水稲王」と誉れ高い評価を受けた藤原長作氏の米作りへの執念など、孤軍奮闘して日中の架け橋となった人々の愛と涙、感動の実録集。

「満蒙開拓民」の悲劇を超えて 大類善啓 編著

中国・ハルビン市 方正県物語

「風雪に耐えた 中国の日本人公墓」

「開拓」という名にかけて 悲慘は、飢えと寒さ、そして発疹チラヌで死屍累々、白骨の山に象徴される。苦難を超えて生き延びた人々の貴重な現代史の証言集である。

中国・ハルビン市 方正県物語

「満蒙開拓民」の悲劇を超えて

自画自賛になるが、これもまた貴重な記録だと思っている。なれるだろう。ぜひ、お手にとっていただき、ご叱正をいただきたいと思う。

新著には、松田ちあ、藤原長作、金丸千尋などの人生の軌跡の他、遠藤勇の人生も紹介している。遠藤は残留孤児だったが帰国し、事業で成功した。しかしいつも頭から離れないのは、中国で育ててくれた養父母への思いだった。そして、中国人の養父母の恩に報いようと「中国養父母公墓」を自らの力で建立したのだ。その墓が二つの日本人公墓がある中日友好園林にある。

このような波乱に富んだ人生を収めた『満蒙開拓民』の悲劇を超えて』をこのたび、批評社より上梓することができた。本誌が出る頃には、この新著を書店の店頭でご覧に